

# 第5話 室町時代の文化

戦乱の世であったにもかかわらず、ある種の文物は進歩した。

この時代の特色は、鎌倉時代の剛健な気風が失せたあとに京風の優美さが加わって、一種の淡白な、消極的なものとなったところにある。

室町幕府がはじめて開かれたのは、第96代後醍醐天皇の延元3年（西暦1338年）のことですが、これが正当な幕府といわれるものではなかったことは、既に皆さんもよく承知の通りで、まことに室町時代というのはそれから凡そ54年の後、南北朝の合一した西暦1392年からです。

ちょうど将軍義満が栄華を極めた頃で、社会の秩序もその頃からいくらか回復して、美術工芸なども漸く復興したが、しかし、室町時代の文物がその特色をもっていよいよ発達したのは、将軍義政の時代です。



京都 左京区 銀閣

将軍義政は、応仁の乱の中ばに職を子の義尚に譲った後も、世の大乱などは顧みずに、相変わらず遊びに耽って贅沢に暮らしていましたが、戦いが終わると間もなく京都の東山に別荘を営み、義満の金閣にならって銀閣を建てた。2階建ての立派なもので、はじめは銀を塗るつもりでしたが、世は戦後の不景気で、幕府の財政も苦しい真最中でしたから、とうとう、それは予定通りには行かなかったのです。

けれども、その造り方は頗る風雅で、庭園の一木一石にいたるまで、配置の妙を極めていました。

## 東山時代

義政はここに閑居して、和漢の書画や骨董をもてあそび、しばしば茶の湯を催したりして、風流の遊びにふけたので、義満の頃から漸く復興しかけていた美術や工芸などが長足の進歩をして、大いに発達した。世に義政を東山殿と呼んだところから、これは義満を北山殿と呼んだのと同じわけで、その別荘のある土地の名をとったのです。この時代を美術史などでは東山時代といっています。

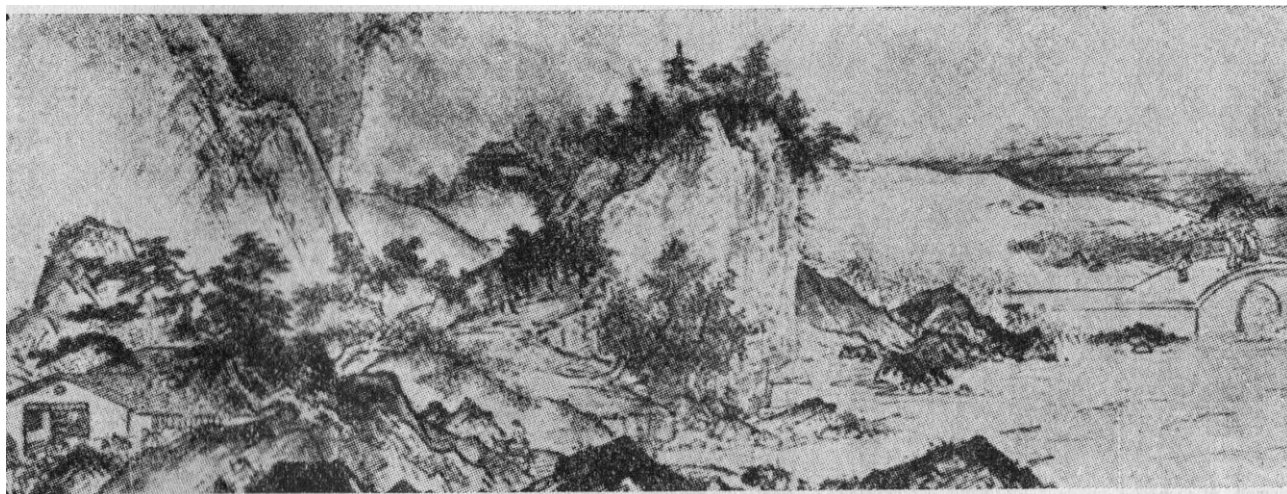
## 絵画

先づ絵画では、鎌倉時代に伝わった宋、元の中国画が大に行われた。初め義持のころに、如拙および明兆が出た。いづれも坊さんでしたが、如拙は山水、人物、花鳥に長じ、明兆は専ら仏画において古今独歩の称があります。明兆は東福寺の殿司という役をつとめていたので、また兆殿司とも呼ばれる。如拙の後に、周文が出たが、この周文の門から雪舟が出ました。

## 第5話 室町時代の文化

### 雪舟

雪舟は備中(岡山県南西部)赤濱の人で、12才の時に、同国の宝福寺という寺に入って小僧となったが、お経などは少しも詠まずに、明けても暮れても絵ばかりを書いています。



雪舟筆の山水画

たびたび師の和尚さんに叱られたが、どうしても絵を書くことを止めようとしなかったので、ある日、きびしく小言を言われた末に、懲らしめのために、柱に縛りつけられた。身体の自由は利かないし、仕方なしに初めはしくしく泣いていたが、やがて、ぼたりぼたりと床に落ちる涙でもって、足の指で鼠を書いた。

一方、和尚さんは暫くの時が経ってから、もう赦してやろうと思いつつ、そこに来て見ると、小僧の足許に鼠がいる。驚いて、しっと足踏みして追ったが、鼠は動かない。よく見ると、小僧が足の指で書いた鼠だったので、ここに始めて雪舟の天才を知って、その後は雪舟が絵を書いても咎めなかったという事です。

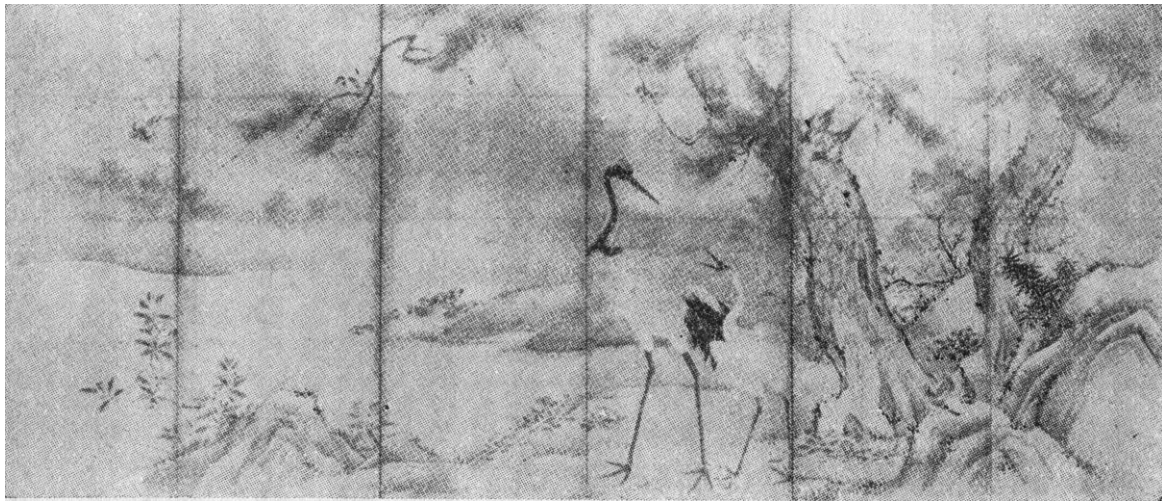
雪舟は、壮年になってから京都にのぼって画法を学び、さらに明に渡って其の地の山水を写し、大いに技を練って帰朝し、ますます妙筆をふるったが、殊に山水の墨絵に長じていた。周防国山口の雲谷寺に住んで、雲谷、又、雲谷軒とも称したので、彼の流れを雲谷派という。禅味を帯びた墨絵で気韻を重んじたので、聞こえています。

### 狩野元信

雪舟と同じ時代に画を以って義政に仕えた人に狩野正信がいたが、その子の元信もまた生まれながらにして画が好きで、僅かに10才の時にはすでに画工として将軍に近侍したほどです。幼少の頃に父に中国の画風を習った上に、大和絵の大家である土佐光信の婿となって、その画法をも学び、和漢の長所を取って1派の画風を開いた。すなわち、狩野派といわれるもので、彩墨を巧みに折衷調和したのです。

元信は絵所預、すなわち絵画の事を掌る所の長官となって越前守に任ぜられたが、後、髪を剃って坊さんとなり、法眼に叙せられた。世に古法眼というのは彼の事です。

なお、狩野派は、この後も代々名人を出して永く栄えた。



かのうもとのぶひつ かちょうが  
狩野元信筆の花鳥画

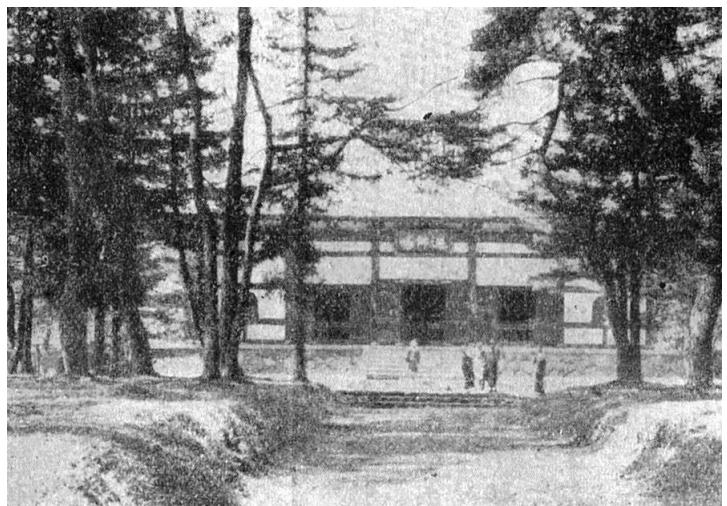
こうげいひん はったつ  
**工芸品の発達**

絵画と伴って、漆塗の術も発達したが、殊に画家の下絵によって精巧な蒔絵を施すこととなつて、大いにその特色をあらわした。また、茶の湯などの流行につれて、陶磁器の明から輸入されるものが多く、従つてその製法も大いに進んだ。後、伊勢の山田祥瑞という人が明に渡つて、明の製磁の法を伝え、肥前の唐津に窯を開くに及んで、ついに唐津焼の名産を出すに至つた。金属彫刻もまた著しく発達したが、中でも後藤祐乗は1代の名家でして、その製作になる目貫や鐔は後人の齊しく珍重しておかないところだ。

ぜんしゅう ござん ござん  
**禅宗の京都五山と鎌倉五山**

仏教は、鎌倉時代の後をうけて、禅宗が盛んに上流社会に行われ、わけても足利氏は深くこれを信じた。尊氏は疎石という坊さんに帰依して、その勧めによつて京都に天龍寺を建て、後醍醐天皇の冥福を祈り奉り、弟の直義は諸国に安国寺を設けさせ、世の治安をはかった。

ついで、義満もまた禅宗を信じて、京都に相国寺を開いたので、天龍寺などと共に名高い禅寺が5個寺に及んだ。義満はその順位を定めて、天龍寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺とし、これを京都の五山といひ、亀山上皇がお建てになつた南禅寺を特にその上に位させた。



京都 右京区 嵯峨 天龍寺

また、鎌倉の5大禅寺、すなわち、建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄妙寺の順位をも定めて、これを鎌倉の五山といつた。

しんしゅう れんによ  
**真宗の蓮如**

## 第5話 室町時代の文化

一方、民間には真宗と法華宗とが広く行われたが、中でも真宗は、応仁の頃に蓮如という傑れた坊さんが出て、大いに宗風をさかんにした。蓮如は本願寺の第8世で、第7世存如の子として生まれた。折柄、本願寺の最も衰えた時だったので、衣食にも事を欠く事が多く、ある時は3日も食べなかったことがあり、又、ある時は月の光で書物を読んだこともあったという。

されば、成長した後も、どんな苦勞も苦勞としなかった上に、生まれつき才弁がすぐれていたもので、諸国をめぐって布教につとめ、きわめて平易な説法でもって大いに男女の信仰を得た。この時、他力本願の教えの趣旨を平易な文章に綴って、広く諸国に配って読ませたのが、今も世に伝えている真宗の「おふみ」又は「御文章」と称するものです。

こうして、一時衰えていた真宗が大いに盛んになると、叡山の僧徒らの中に、これを嫉むものなどが出て来て、ついに、ある夜、京都東山の本願寺はこれらの悪僧の一味に襲撃されて、焼き払われてしまったので、蓮如は難を避けて江州（滋賀）に遁れ、更に越前に移ってしきりに北国に布教した。

### 真宗中興の祖

このために、北陸方面にはとりわけ信者が殖えた。後、京都に帰り、文明10年、山城の山科に本願寺を建て、明応5年には大阪の石山に別院を建てて、後に大いに発展する基礎を定め、同8年3月25日、85才をもってその一生を終えた。真宗は親鸞によって開かれたが、真に確立したのはこの蓮如の時からですので、蓮如はまた真宗中興の祖といわれます。

### 五山文学

学問は、戦乱つづきの世のことでしたので、一般には衰えたが、僧侶の間では却って大いに盛んでした。殊に五山の僧侶は、禅学にくわしいばかりでなく、儒学にも通じていたので、幕府の顧問に備わり、あるいは中国に使いして外交の事に與かたりした。なお序に言うと、次の戦国時代になると、武将もまた多く僧侶を用い、戦陣にも伴って、手紙や談判の文を書かせたり、あるいは使いをさせたりしたが、この風は更に永く続いて、江戸時代の初期にまで及んでいる、

僧侶の中には、また詩文に長じたものも少なくなかった。わけでも義満の頃の義堂および絶海のごときはその最たるものとして聞こえている。又、義政のころの周鳳は「善隣国宝記」を著して聞こえ、清啓は程朱の学を唱道して後世の宋学隆盛の基を開いた。

### 寺子屋

こうして、僧侶は、平安時代以後、久しく衰えていた漢文学を再興すると共に、ついには教育の業にも携わったので、しだいに寺子屋も起こりはじめた。寺子屋が明治維新以前の、いわば私立小学校であったことは皆さんも知っているでしょうが、初めは専ら寺院に一般の家の子供を集めて、主として習字と読書を学ばせたものです。

## 第5話 室町時代の文化

そうりょいがい がくしゃ  
僧侶以外の学者

なお、僧侶の他には、公家では関白一條

兼良が博学の聞こえが高く、『樵談治要』

『公事根源』などの著がある（訳注：樵は、きこり）。

武家では関東の上杉憲実が、その領内に足利学校を復興して、多くの書物を納め、学田を寄付して、学者の研究に利便

を与え、又、武蔵の金沢文庫（横浜市南部）

をも再興して僧侶の講学の便に供したことが、乱れた室町時代にはまことに珍しい事として伝えられています。

こきんでんじゅ  
古今伝授

すでに学問が僧侶の手にあったのですから、文芸もまた僧侶によって起こされたものが多い。和歌は、東常縁という人が武人から出て、古今伝授という秘法を唱えなどして、表面は中々さかんでしたが、その実、この秘法というのは、愚にもつかない穿鑿（訳注：細かく調べる）に過ぎないものだったので、和歌としての実質は寧ろ大いに衰えました。

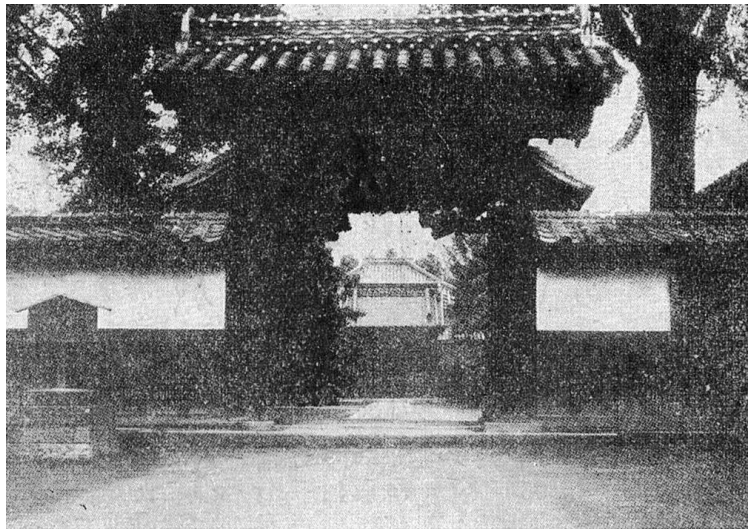
和歌の一体というべき連歌は、既に（第三巻の『吉野時代の文化』の話に）述べておいた通り、鎌倉時代から流行していたのですが、南北朝時代を経て、室町時代に入ると殊に盛んに行われた。ある人が上の句または下の句をよめば、他の人が残りの句をよんで始めて一首の和歌とするのですから、歌道の本来から言えば、もとよりまじめなものではありませんが、一種の遊戯として、玩ぶには、思うに、頗る興味の多いものだったのでしょう。

第103代 後土御門天皇のころに出た宗祇法師は、殊にこの道の達人といわれます。

そうぎ  
宗祇

宗祇は紀伊の人で、本姓は飯尾氏です。若い時に出家して律僧となり、生まれつき好きでした和歌を熱心に学んで、古今伝授をも受けたが、後、更に連歌を学ぶに至って、忽ちその蘊蓄をきわめ、当時、天下第一の称があったので、ついに朝廷から「花の下」の号を賜った。（この「花の下」は、爾来、連歌宗匠の棟梁の称となって、ずっと江戸幕府の時代までつづいた。）

宗祇は旅行が好きで、つねに四方に遊んで吟詠を楽しんでいた。今、武蔵の隅田川のほとりにいるかと思うと、今は九州にいるという風で、殆ど定住することが無かったといわれます。第104代 後柏原天皇の文亀2年に、高齢の82才で信濃から武蔵に出で、人間川から鎌倉を経て駿河に向い、箱根の湯本に泊まった時に、俄かに病にかかって没したが、その臨終の際まで友人と連歌を詠み交わしていたということですから。



栃木 足利

あしかががっこう いせき  
足利学校の遺跡

## 第5話 室町時代の文化

ある時、彼が山中で賊にあって、何もかも取られてしまったが、平気で行くと、賊が追いかけて来て、彼の長い白い髯を切って取ろうとした。これにはさすがに彼も驚いて、「こんなものを取って何にするのか？」と訊くと、賊は、「搦子（訳注：長い毛を柄に付けた仏具）にするのだ」と言ったので、宗祇はすぐに、わがために搦子ばかりはゆるせかし 塵のうき世をすてはつるまで

と詠んだ。賊ははじめて彼が名高い歌詠みなのを知り、自分の悪い所業を恥ぢて、前に取ったお金をもみんな返して、あやまったということです。悠々と旅を楽しんで、四方を遍歴している宗祇の面目を偲ぶに足る逸話です。なお、宗祇には、『吾妻問答』『筑紫道の記』『新撰築波集』などの著があります。

### 猿楽

鎌倉時代に執権北條高時の大いに好んだものに田楽というのがあったが、室町時代になると、この田楽は衰えて猿楽がこれに代わった。尤も猿楽とはいっても、室町時代のそれは在来のそれとは大いにちがっていた。とというのは、もと猿楽は滑稽を主としたもので、わが国にはずいぶん古くから行われ、平安時代には殊に盛んに行われたものだったが、室町時代のそれは、その滑稽な分子は狂言として分離し、別に日本在来の歌舞や田楽に中国の劇などを調和して新たに作り上げた一種の舞楽だったからです。

### 能楽と謡曲

これに用いた歌を謡といい、舞を能といったところから、後にはこれを能楽といった。義満も義政も共にこの能楽を好んだので、これに用いる台本すなわち謡曲もまたしきりに作られたが、その文は多く能役者の手になった。今も何百篇となく伝わっているが、古文学の名文句を巧みに取り入れたりして、一種のさびしい物静かな趣味をあらわしている、前に述べた連歌に、当時の笑いの一面があらわされたとすれば、この謡曲には涙の一面がこめられているといついでいでしょう。

これを演じる家は、義政のころに、既に早く観世、金春、宝生、金剛の4流にわかれて、はるかに遅れて江戸時代になってから喜多流が起こった。この5流が今日もそのまま相並んで行われている。

### 書院造り

また、この時代には、幕府が京都にあったので、鎌倉時代の剛健、質樸な気風はしだいに無くなると共に、一方、禅宗などの影響を受けて、一般に瀟洒（訳注：さっぱりした様）、淡泊を好む風が起こった。家屋も平安時代の寝殿造りは廃れて、もと僧侶の学問所であった書院の造り方が一般に行われた。それは、入り口に玄関を設け、室内には畳を敷きつめ、座敷に床の間を作って画幅をかけ、香炉、挿花な utsuru などを飾って風流の趣を添えたもので、今日の木造住宅は、実にこの書院造りから発達したのです。

### 服装および作法

また、武士の衣服は、素襖、長袴から、後には肩衣、半袴などに移って行き、女子は小袖をうちかけとして着る風が流行した。食物の料理法もますます進んで、食事の時の方式などもいろいろと備わった。こうして今日の礼式作法は多くこの頃から起こったのであります。

## 第5話 室町時代の文化

( 第5話 室町時代の文化 終わり。 次は前頁に戻り、 第6話 関東の動乱 〜)